

特集

胎児医療を知る 出生前診断の“その後”と 助産師の役割

母の胎内にいる児の病気について検査・治療を行う「胎児医療」。生まれる前に検査・診断し、治療を行うことで、予後が改善する場合があります。日本でも少しずつ広がりを見せていますが、出生前の検査・診断が普及しつつある一方で、胎児治療ができる疾患も施設も限られています。このアンバランスな状態は、女性と家族に非常に難しい問題をもたらし、その妊娠に伴走する助産師もまた、ケアの困難や無力感を覚えることが増えていると聞きます。

現状では限定的とは言え、出生前に異常が見つかった胎児に治療の選択肢があることを知り、そこで助産師に求められる役割を学ぶことは、意味があります。一方で、どれほど医療が発達しても、予後が不良となったり、妊娠中断となったりするケースもあります。「胎児」を取り巻く状況の最先端を知り、あらためて、「そこにいる」助産師に何ができるのか、一緒に考えてみませんか。